

認識と価値形成

——企業と人間の進化の問題の基礎——

(三)

笠原俊彦

3—5 狭義の価値と位階

(1) メタ狭義の価値としての位階

狭義の価値については、その抽象の水準に関連して、独特の位階が存在するように思われる。ここに狭義の価値の位階とは、狭義の価値についての高低の観念である。

われわれは、狭義の価値について、心のうちで、高低の評価をする。換言すれば、われわれは、狭義の価値について高低の観念を形成する。ここにいう高低の評価ないし高低の観念の形成は、それ自体、価値判断ないし価値形成である。それは、何らかの狭義の価値に対してなされる高低という狭義の価値観念の形成である。ここでは、狭義の価値について狭義の価値が形成されていることが注意されなければならない。われわれは、前者の狭義の価値を W_0 、後者の狭義の価値を W_w と表して、これを区別することにしよう。

この場合、前者の狭義の価値 W_0 について注意されなければならないことは、それが、やはり、対象ではなく、対象観念であること、これである。それは、われわれの心のうちに形成される狭義の価値、すなわち内在的価値としての狭義の価値、を対象とし、これについて、われわれの心のうちに形成される対象観念である¹⁾

われわれは、われわれの対象観念形成機構が、さまざまな観念を対象とし、

これについて対象観念を形成しうることに留意しておくべきであろう。それは、一方で、対象観念を対象とし、これについて対象観念を形成しうるのであるが、他方で、また、狭義の価値を対象とし、これについて対象観念を形成しうるのである。

さて、狭義の価値を対象として対象観念 W_o が形成されるとき、ここに対象とされる狭義の価値を、わたくしは、対象としての狭義の価値と呼び、これを O_w で表すことにしよう。すでに述べた W_o は、対象としての狭義の価値 O_w についての対象観念であり、わたくしは、これを、対象観念としての狭義の価値と呼ぶことにする。

狭義の価値 W_w は、対象観念としての狭義の価値 W_o について形成され、これに付与される狭義の価値である。ここでは、対象観念を対象とする対象観念の形成の場合と同様、いわば次元を異にする観念の形成が問題となっていることが注意されなければならない。狭義の価値 W_o と狭義の価値 W_w とは次元を異にする狭義の価値である²⁾

このことを表すために、わたくしは、 W_w を、対象観念としての狭義の価値 W_o に対して、とくに、メタ狭義の価値と呼ぶことができるであろう。わたくしがここでとりあげようとするものは、次元を異にする2つの狭義の価値 W_o 、 W_w の間の関係であることが注意されなければならない。

(2) 利害における狭義の価値の一般的妥当性と位階

対象観念としての狭義の価値 W_o については、その抽象性の度合が高くなるほど、その位階が高くなる、すなわち高いメタ狭義の価値 W_w が付与される、

1) ここでも、対象観念と狭義の価値とから構成される広義の価値が成立しうる。

いま、一般に対象観念を O 、狭義の価値を W とするとき、この二つを要素とする広義の価値を (O, W) とすれば、ここにいう広義の価値は、その特殊形態としての (W_o, W_w) となる。

2) そして、また、 O_w も、 W_o 、 W_w と次元を異にするということが出来るであろう。ただし、 O_w と W_o 、 W_w との次元の相違にいう「次元」の意味は、 W_o と W_w との次元の相違にいう「次元」の意味とは異なる。

という事態が存在するように見える。対象観念としての狭義の価値 W_0 は、これが、感覚対応的狭義の価値から、感覚非対応的狭義の価値へと移行すればするほど、すなわち、その感覚非対応性が増大すればするほど、その位階を高めるように見えるのである。わたくしは、このことを、ここで、仮に、対象観念としての狭義の価値の抽象性一位階対応関係、あるいは、単純に、狭義の価値の抽象性一位階対応関係と呼ぶことにしたい。

わたくしがここで考察しようとするのは、狭義の価値の抽象性一位階対応関係がはたして存在するか、それとも、対象観念としての狭義の価値 W_0 とメタ狭義の価値 W_w との間に、抽象性一位階対応関係とは別個の何らかの関係が存在するのか、これである。

ただし、ここでは、わたくしは、さまざまな種類の狭義の価値について、この問題を検討しようとするわけではない。ましてや、わたくしは、狭義の価値一般について、この問題を検討しようとするわけではけっしてない。わたくしがここでなそうとするのは、ただ、ある特定種の狭義の価値について、この問題を検討し、このことによって、この問題の性格をより明確化し、この問題の解決のための手掛りを得ること、これである。

さて、わたくしが、ここでとりあげようとする特定種の狭義の価値とは、人間の利害に関わる狭義の価値である。ここに人間の利害を、わたくしは、一人の人間または複数の人間の利益またはその得失として理解することができるであろう。わたくしは、これを、また、一人または複数人の福祉と呼ぶこともできる。

このような人間の利害は、いうまでもなく、広義の価値の一種である。そして、人間の利害に関わる狭義の価値とは、利害というこの広義の価値を構成する要素としての狭義の価値に他ならない。この狭義の価値は、抽象性一位階対応関係を、最も顕著に示すように思われる狭義の価値種の一つである。

人間の利害に関わる狭義の価値は、利害という広義の価値が、個人の利害から複数人の利害ないし集団の利害へ、しかも、より多くの人々の利害、ないし、

より大きな集団の利害へと、すなわち、私利私欲から公利公欲へと、移行するにつれて、その位階を高めていくように見える。

このことについては、われわれは、G. Myrdal が、人間の価値判断 (valuation) について、つぎのように述べていることに注意しなければならない。

かれによれば、特定の社会において人々が有する価値判断のうちには、道徳的な高低のさまざまな段階に位置するものが存在する。そして、価値判断のこの段階における位置は、価値判断が、特定の個人または集団のみに妥当すると感じられる一般性 (generality) の低い価値判断から、全国民または全人類に妥当と感じられる一般性の高い価値判断に移行するにつれて、高くなるのである³⁾

ここに Myrdal のいう価値判断は、われわれの言葉でいえば、価値判断というより、むしろ、価値、しかも広義の価値である。そして、かれがここにとりあげている価値判断、すなわち、われわれのいう広義の価値は、人間の利害を、その内容とするものであり、われわれは、これを、利害としての広義の価値である、ということが出来る。そこで、われわれは、Myrdal において、利害という広義の価値が、その一般性を増大させるとき、これに応じて、それは、より高い道徳的位階を与えられる、と考えられていることを、理解することができるのである。

Myrdal のいうこのような事態は、たしかに、われわれが確認することのできる事実の一つであると思われる。われわれの社会には、一般性の高い利害を、一般性の低い利害よりも、道徳的に高い、とする考え方が存在するように見える。この考え方は、また、われわれの心のうちにもあって、われわれの行為を、少なくともある程度、規定している。このように考えるとき、われわれは、利

3) このことについては、つぎを参照のこと。

G. Myrdal, "Objectivity in Social Research", New York, 1969, especially p.16.

拙稿「社会科学における偏見の実在判断の形成と価値判断の処理」『香川大学経済論叢』第57巻第4号、昭和60年3月。

利害という広義の価値について、その一般性一位階対応関係を見出すことができるであろう。

この場合、われわれは、また、個人的利害から集団的利害へ、しかも、より大きな集団的利害へ、という利害の一般性の増大について、これが、具体的な利害から抽象的な利害へ、という利害の抽象性の増大を意味する、と考えることができる。それは、いわば目にみえる身近な利害から、目にみえない迂遠な利害への移行を意味するように思われるからである。

われわれは、さきに、対象観念について、感覚的对象観念から非感覚的对象観念への移行を、対象観念の抽象性の増大として理解したのであるが、この意味での抽象性は、ここにいう抽象性と同様である、と考えることができるであろう。なぜなら、両者は、ともに、感覚的に把握しうる性質を具体性とし、感覚的に把握しえない性質を抽象性とする思考にもとづくように思われるからである。

このように考えるとき、われわれは、利害という広義の価値について、その抽象性と位階との対応、すなわち抽象性一位階対応関係をも、見出すことができるであろう。

さて、ここで、われわれが問題とするべきことの第一は、利害という広義の価値の一般性一位階対応関係ないし抽象性一位階対応関係と、この広義の価値の構成要素である狭義の価値の一般性一位階対応関係ないし抽象性一位階対応関係との関係いかんである。

われわれは、いま、Myrdal の考え方を手掛りとして、利害という広義の価値について、一般性一位階対応関係ないし抽象性一位階対応関係を見出した。だが、われわれの問題は、広義の価値の一般性一位階対応関係ないし抽象性一位階対応関係ではなく、狭義の価値の一般性一位階対応関係ないし抽象性一位階対応関係であることが注意されなければならない。

このことについて、われわれは、まず、利害という広義の価値の一般性ないし抽象性と、その構成要素としての狭義の価値の一般性ないし抽象性との関係

を、考察しよう。

利害という広義の価値の一般性ないし抽象性は、何よりも、その対象観念の一般性ないし抽象性によって、与えられるようにみえる。われわれは、利害という広義の価値が、個人的利害から集团的利害へ、しかも、より大きな集团的利害へと移行するにつれて、その一般性ないし抽象性を増大させる、と述べたのであるが、この広義の価値の一般性ないし抽象性の増大をもたらす、個人的利害から集团的利害への移行、しかも、より大きな集团的利害への移行とは、何よりも、利害を構成する対象観念の一般性ないし抽象性の増大に他ならない、とみえるのである。

だが、それにもかかわらず、利害という広義の価値の一般性ないし抽象性は、その構成要素である対象観念の一般性によって生じるわけではない。

われわれは、すでに、広義の価値が対象観念のみによって成立しうるものではないことを知っている。広義の価値は、対象観念に対して狭義の価値が結び付くことによって、はじめて成立する。対象観念が存在しても、これに狭義の価値が結び付かなければ、広義の価値は成立しない。この場合には、ただ、認識の成果としての対象観念が存在するだけである。われわれは、広義の価値を価値として成立させるものが、まさに狭義の価値であることを銘記しなければならない。

このことは、広義の価値の性質が、これを構成する対象観念によってではなく、むしろ、同じくそれを構成する狭義の価値の性質によってこそ、規定されるものであることを、われわれに示唆する。それは、ここでは、利害という広義の価値の一般性ないし抽象性が、その構成要素としての狭義の価値の一般性ないし抽象性によってこそ、規定されるものであることを、われわれに示唆するのである。

このように考えるとき、われわれは、利害という広義の価値の構成要素としての狭義の価値が、一般性をもつ対象観念に結びつくその性質に注目しなければならない。狭義の価値は、一般性ないし抽象性を増大させていく対象観念に

結びつくものへと、その性質を変化させうる。この場合、われわれは、狭義の価値が、一般性ないし抽象性を増大させていく対象観念について形成されこれに結びつくものへと、その性質を変化させていくことを、狭義の価値の一般性ないし抽象性の増大と考えることができるであろう。

われわれは、対象観念が一般的ないし抽象的な内容をもつとき、これについて形成され、これに結びつく狭義の価値は、まさに、一般的ないし抽象的な内容をもつ対象観念について形成され、これに結びつくというその性質によって、一般性ないし抽象性をもつ、ということが出来る。そして、狭義の価値が、このように一般性ないし抽象性をもつとき、われわれは、これを構成要素として成立する広義の価値も、また、一般性ないし抽象性をもつ、ということが出来るであろう。

以上において、わたくしは、利害という広義の価値の一般性ないし抽象性と、その構成要素としての狭義の価値の一般性ないし抽象性との関係について述べた。利害という広義の価値の一般性ないし抽象性は、その構成要素としての狭義の価値の一般性ないし抽象性によって与えられる。そして、この狭義の価値の一般性ないし抽象性とは、この狭義の価値が、広義の価値のもう一つの構成要素である対象観念の一般性ないし抽象性に対応して形成され、これに結び付く、その性質を意味する。

つぎに、われわれは、利害という広義の価値の位階と、この広義の価値を構成する狭義の価値の位階との関係を、考察しなければならない。

狭義の価値の一般性ないし抽象性は、狭義の価値が、一般性ないし抽象性をもつ対象観念について形成され、これに結びつくという、その性質を意味した。狭義の価値の位階は、狭義の価値の一般性ないし抽象性という、この性質に対して与えられる。ここでは、狭義の価値を対象 Ow とし、この一般性ないし抽象性を対象観念 Wo として、これについて、何らかの位階というメタ狭義の価値 Ww が形成され、付与されるのである。

狭義の価値 Ow の一般性ないし抽象性という対象観念 Wo に対して、このよ

うに何らかの位階 Ww が与えられるとき、ここに対象とされる狭義の価値 Ow は、これが対象観念 Wo として把握されるがゆえに、この位階 Ww を与えられる。そして、このとき、狭義の価値 Ow を構成要素とする広義の価値にも、この位階 Ww が与えられることになる。

広義の価値の価値としての性質は、その構成要素としての狭義の価値の性質によって決定されるものであった。このことによって、広義の価値は、その要素としての狭義の価値が一般性ないし抽象性をもつとき、一般性ないし抽象性をもつことになったのである。同様に、広義の価値は、その要素としての狭義の価値が、この一般性ないし抽象性に対して何らかの位階を与えられるとき、その一般性ないし抽象性に対して、この位階を与えられる。

以上から、われわれは、利害という広義の価値について、この要素としての狭義の価値が一般性一位階対応関係ないし抽象性一位階対応関係をもつとき、これに規定されて、広義の価値自体が同様の関係をもつことを、理解することができるのである。

さて、われわれは、以上において、第一に、利害という広義の価値の一般性一位階対応関係ないし抽象性一位階対応関係と、この広義の価値の構成要素としての狭義の価値の一般性一位階対応関係ないし抽象性一位階対応関係との関係を問題としてきた。われわれが問題とするべきことの第二は、一般性と抽象性との関係である。

われわれは、以上において、利害という広義の価値およびこれを構成する狭義の価値について、一般性と抽象性とを区別しなかった。われわれは、むしろ、これらを、同じ性質であるかのように扱ってきたのである。だが、この二つは、はたして、このように扱うことのできるものなのであろうか。

この間に答えるためには、われわれは、まず、利害という広義の価値、そして、これを構成する狭義の価値について、その一般性の意味を問い、つぎに、これと抽象性との関係を考察しなければならない。

利害という広義の価値の一般性を、われわれは、この価値が多くの人々に妥

当するという性質として理解することができるであろう。利害という広義の価値の一般性の増大とは、それが、特定の個人の利害から複数の人間の利害へ、さらに、より多くの人間の利害へと、移行することを意味したからである。それは、利害が、私的利害から公的利害へと移行する事態、として理解されうるものであった。ここに公的利害は、その極限においては、有機体種の一つとしての人間一般の利害として理解されうるであろう。

このような利害の一般性を、わたくしは、利害の一般的妥当性 (allgemeine Gültigkeit, general validity) と呼ぶことができる。このことは、利害という広義の価値を構成する狭義の価値の一般性についても、もちろん、同じである。

この一般的妥当性の意味での一般性は、何らかの利害としての広義の価値、または、これを構成する狭義の価値が、たんに多くの人々のうちに存在することを意味するものではない。多くの人々のうちに存在するという意味での一般性を、わたくしは、一般的妥当性と区別して、一般的存在性 (allgemeine Daseinheit, general existence) と呼ぶことにしよう。

一般的存在性の意味での一般性は、私的利害にも、公的利害にも、存在する。そして、これらの利害が、より多くの人々の心を支配し、その行動を規定する度合いについていうならば、われわれは、しばしば、私的利害の方が、公的利害よりも高い、とさえいうことができるのである。われわれは、このことを、私的利害の一般的顕現性 (allgemeine Manifestierung, general manifestation) が、公的利害のそれよりも高い、と表現することができるであろう。このように、一般的顕現性が高いにもかかわらず、私的利害は、公的利害に比べ、道徳的に低いものとして評価されるのである。

このことから、われわれは、利害とこれを構成する狭義の価値との道徳的地位を決定しうる一般性として、一般的存在性でも、一般的顕現性でもなく、これから区別される一般的妥当性を措定しなければならないことを理解することができるであろう。このようにして、われわれは、利害という広義の価値について、そして、この構成要素としての狭義の価値について、一般的妥当性一位

階対応関係を見出すことができるのである。

さて、一般性を、以上のように一般的妥当性として理解するとき、この一般性すなわち一般的妥当性は、抽象性と、どのような関係にあるのであろうか。

われわれは、さきに、Myrdal の論述に関連して、利害という広義の価値、およびその狭義の価値の、一般性の増大が、それらの抽象性の増大を意味する、と考えた。そして、この考えにもとづいて、利害という広義の価値および狭義の価値について、その一般性一位階対応関係のみならず、その抽象性一位階対応関係をも、見出したのである。このことは、一般性を一般的妥当性として理解しても、もちろん、変わるものではない。利害についての一般性の増大とは、もともと、その一般的妥当性に他ならないからである。

だが、ここで、われわれは、われわれの以上の考察が、利害という広義の価値、そして狭義の価値について、これらの一般性と、これに対する位階との関係を、直接にとりあげてはいても、それらの抽象性と、これに対する位階との関係を、直接にとりあげているものではなかったことに、注意しなければならない。

以上の論述において、抽象性一位階対応関係は、一般性一位階対応関係とは異なり、それ自体として成立することが主張されているわけではなく、抽象性が、一般性に、いわば対応することによって、一般性一位階対応関係から、派生的に成立することが述べられているにすぎないのである。

このことは、利害という広義の価値、そして狭義の価値について、それらの位階が、それらの抽象性そのものではなく、それらの一般性ないし一般的妥当性にこそ、もとづくものである可能性を示唆する。

この場合、利害という広義の価値、およびこの要素としての狭義の価値について、それらの一般性ないし一般的妥当性と抽象性が、もしも同一であるならば、われわれは、それらの一般的妥当性一位階対応関係と、抽象性一位階対応関係を、同一のものとして語るができるであろう。他方、それらの一般的妥当性が、抽象性と同一でなければ、われわれは、それらの一般的妥当性一

位階対応関係と抽象性一位階対応関係を、同一のものとして語ることはできない。この場合には、われわれは、それらの一般性一位階対応関係ないし一般的妥当性一位階対応関係についてのみ、語るべきである。

利害という広義の価値およびこの要素としての狭義の価値については、それらの一般的妥当性と抽象性との対応を、わたくしは、少なくとも、価値の抽象性についてのわたくしの研究の現在の段階においては、否定することができない。しかし、両者のこのような対応は、両者が同一であることを意味するものでは、決してない。

それだけではない。わたくしは、利害という広義の価値およびこの構成要素としての狭義の価値について、一般性とこれに対する位階との関係を、対応関係として表現してきたのであるが、この対応関係は、一般性ゆえに位階が与えられるという、いわば緊密な関係であることが、注意されなければならない。これに対して、わたくしが同じく対応関係として表現した一般性と抽象性との関係は、抽象性ゆえに位階が与えられるという緊密な関係ではない。

わたくしには、後者の対応関係は、利害という価値種について、または、もしかすると、これを含むいくつかの価値種のみについてみられる、偶然の一致であるようにみえる。このことは、一般的妥当性とこれに対する位階の対応が、他の多くの価値種についても、おそらく、成立することがらであり、あるいは、一般的存在性をもつことがらであるかもしれないのに対して、一般的妥当性と抽象性との対応が、せいぜい、一つまたは少数の価値種についてのみ、みられうることがらであることが示されるとき、われわれに対する説得力を得るであろう。

だが、このことは、われわれが、ここで、これ以上立ち入るべきことではないであろう。利害についての、そして、これ以外の価値種についての、抽象性、一般性、そして位階の考察は、外在的価値、とりわけ社会的価値について、立ち込んで論じることなしには、著しく困難または不可能である、と思われるからである。わたくしは、以上において、外在的価値について述べることを極力

避けてきた。だが、ここにいう利害、そして位階は、むしろ、主として、外在的価値として存在するのであり、これらについての内在的価値は、わたくしには、外在的価値との関わりにおいてのみ、存在する、とさえいうことができるほどのもの、とみえるのである。

3-6 狭義の価値と価値形成機構との特殊性

対象観念および対象観念形成機構についてと同様に、狭義の価値および価値形成機構についても、その特殊性が問題となる。このことについても、わたくしは、ここでは、わたくしのこれからの考察にとって重要だ、と思われる三つの局面、すなわち、種的特殊性、集団的特殊性、および個体的ないし個人的特殊性、をとりあげておこう。

(1) 種的特殊性

われわれは、対象観念形成機構および対象観念の場合と同じく、価値形成機構および狭義の価値という言葉で、人間という特定の有機体種のそれについてだけでなく、人間を含むあらゆる有機体種のそれについて、用いることとしよう。われわれは、同様に、また、狭義の価値を、無意識的なものだけでなく、意識的なものまでを含むものとして、考えることにしよう。

このとき、われわれは、有機体種によって、狭義の価値および価値形成機構が特殊であること、に気がつくであろう。すなわち、われわれは、狭義の価値および価値形成機構についても、種的特殊性ないし種差を認めることができるのである。

このことは、ほんのいくつかの例を思い浮かべるだけで、われわれが納得できることである。例えば、われわれは、牛とは異なり、わらを美味だとは思わないし、また、コアラと異なり、ユーカリの葉を美味だとも思わない。牛も、ユーカリの葉を美味だとは思わないであろうし、コアラも、わらを美味だとは

思わないであろう。このような例は、味覚的对象観念に付与される狭義の価値、およびこの狭義の価値を形成する機構が、人間、牛、コアラによって異なりうることを示している。

人間の狭義の価値および価値形成機構は、それぞれに進化の過程にあるさまざまな有機体種のその一つであり、それは、人間に特殊な性質をもつ。この場合、人間については、その価値形成機構が、それ自体で、著しく多岐にわたる狭義の価値を生み出していることが、とくに注意されなければならない。価値形成機構の機能のこのような多様性は、人間の価値形成機構の特質の一つであり、それは、対象観念形成機構の機能の多様性ととも、多様な広義の価値を生み出す。このことによって、人間は、じつに豊かな生活を営むことができるのである。

人間の価値形成機構にみられる機能のこのような多様性は、すでに述べたことから明らかなように、対象観念形成機構の機能の多様性との関連において、生成したものと考えられる。

それは、まず、対象観念形成機構の感覚的对象観念形成機能の発現と関連して、感覚対応的狭義の価値形成機能として発現し、つぎに、非感覚的对象観念形成機能の発現と関連して、感覚非対応的狭義の価値形成機能として発現したものであろう。後者については、われわれは、これをかなり明確に示すものの一つとして、狭義の価値を対象とする狭義の価値、すなわちメタ狭義の価値、の形成機能を想起することができる。

だが、このような機能の多様性にもかかわらず、人間の価値形成機構は、上述の牛やコアラの例からも推測されるように、他の有機体種の価値形成機構が形成する狭義の価値のすべてを形成するわけではない。それは、その機能の多様性にもかかわらず、対象観念形成機構の場合と同様に、有機体の価値形成機能のうち特定の一部分を備えているにすぎないのである。

価値形成機構および狭義の価値の種差は、じつに多様である。それぞれの有機体種は、それぞれに特殊な狭義の価値を形成しうるものであり、一つには、こ

のことによって、著しく異なる生活を営むことになる。

このような種差をもつ価値形成機構および狭義の価値は、有機体一般の進化の過程において出現し、やがては消滅していく、さまざまな有機体種の特殊な進化の過程のそれぞれにおける現象の一つであるだけでなく、また、それ自体が、進化の特殊な過程をもつ。そして、Popperの内部的淘汰の理論にしたがって、このことを考察するならば、このような価値形成機構および狭義の価値こそ、対象観念形成機構および対象観念と連携し、あるいは結合して、その有機体種の進化を規定する主要因、すなわち、Popperがその内部的淘汰の理論における最も重要な内部的淘汰圧として位置づけた、選好ないし選好構造を、形成するのである。

このことを人間について考えるとき、上述した人間の価値形成機構の機能の多様性は、その対象観念形成機構の機能の多様性ととともに、多様な選好ないし選好構造を形成し、人間の進化に、多岐にわたる影響を与えうることに注意されなければならない。

(2) 集団的特殊性

対象観念形成機構および対象観念と同様、人間の価値形成機構および狭義の価値にも、集団的特殊性ないし集団差がある。人間は、それぞれが属する集団、およびこの集団において占める位置によって、特殊な価値形成機構をもち、特殊な狭義の価値を形成することがある。人間の価値形成機構および狭義の価値は、狭義における集団差および集団内位置差を含む、広義における集団差を示すのである。

このことは、さまざまな集団によって、さらには集団内位置によって、人々が、例えば、食物等に対する好みを異にし、または、何らかの行動に対する評価を異にしうることから、明らかであろう。人間は、かれが属する集団、およびこの集団においてかれが占める位置によって、特殊な対象観念形成機構のみならず、特殊な価値形成機構をもちうるものであり、この二つは、連携して機能

し、人間のうちに、集団および集団内位置に特殊な広義の価値を形成させるのである。

この場合、人間のうちに、かれが属する集団に特殊な狭義の価値を形成させる価値形成機構についても、われわれは、対象観念形成機構についてと同様に、外部的機構と内部的機構とを区別しなければならない。

ここにいう外部的機構は、何らかの集団のうちに存在する機構であり、これは、この集団に属する個人がそれぞれ自らのうちに有する価値形成機構、すなわち内部的機構としての価値形成機構、に働きかけ、個人のうちに、この集団および集団内位置に特殊な狭義の価値を形成させる。このように、集団のうちにあって、個人の狭義の価値の形成に作用する外部的機構とは、外在的価値、とりわけ制度、を構成する狭義の価値である。

このような外部的機構は複数であり、これらは、一方において、相互に関連し作用し合うのであるが、しかし、他方において、これらは、また、それぞれ、独自性をもって発展しうる。この結果として、われわれは、多様で、しかもしばしば相互に矛盾する、複数の外部的機構の同時的存在をみることになる。

それだけではない。われわれは、さまざまな外部的機構が、その相互間において矛盾しうるのみならず、それぞれの内部においても矛盾しうることを忘れてはならない。対象観念としての外部的機構のみならず、狭義の価値としての外部的機構も、しばしば、複数の要素ないし要素的機構から構成されるのであるが、これら要素的機構は、相互に矛盾しうるのであり、かくして、それ自体で矛盾する一つの外部的機構を構成しうるのである。

特定の個人は、通常、複数の集団に属し、それぞれの集団において、何らかの位置を占めている。このことによって、かれは、その内部的機構としての価値形成機構、そして狭義の価値に、かれが属する複数の集団それぞれの外部的機構の影響を受けることになる。これら外部的機構は、相互の矛盾によって、そして、それぞれの内部における矛盾によっても、この個人に作用する。かくして、かれは、自らのうちに、それ自体として、また相互に矛盾する、さまざま

まな狭義の価値を形成し、抱懐することとなりうるのである。

対象観念形成の場合と同様に、狭義の価値の形成の場合についても、複数の外部的機構の間における矛盾の統合、および、それぞれの外部的機構の内部における矛盾の統合が、問題となる。そして、これらの統合においても、論理と力とが作用しうる。

ここで、われわれが注意しなければならないことは、対象観念の形成の場合に比べて、狭義の価値の形成の場合には、外部的機構の矛盾の統合が、とりわけ、その論理による統合が、困難である、と思われることである。なぜなら、対象観念形成機能と比べるとき、価値形成機能は、より[・]固[・]定[・]的、ないしより[・]硬[・]直[・]的であり、したがって、これを改変することが、より困難である、と思われるからである。

このことについては、われわれは、価値形成機構が、とりわけ、論理の作用を受け難い性質をもつように思われることに注意するべきであろう。対象観念、なかでも意識的对象観念の多くが、論理的に構築され、ときには純粋な論理的構造物としてさえ形成されうる⁴⁾のに対し、狭義の価値は、このようなものとしては形成されえないのである。

しかし、それにもかかわらず、われわれは、もちろん、狭義の価値の形成についても、外部的機構の合理的統合を諦める必要はないであろう。そして、この合理的統合については、われわれは、狭義の価値に対するメタ狭義の価値としての位階の作用を看過することができない。メタ狭義の価値としての位階は、論理と結びついて、外部的機構の合理的統合を可能とする。

この場合、メタ狭義の価値としての位階は、それ自体、論理化の対象となり、より合理的に形成されうる⁵⁾。このように論理化されるとき、メタ狭義の価値としての位階は、外部的機構の矛盾を論理的に統合するための前提、一種の価値

4) ここにいう純粋な論理的構造物としては、われわれは、例えば幾何学における点、線、面、三角形などの観念を想起することができるであろう。

5) この場合には、メタ狭義の価値が対象化され、これについて対象観念が形成されることになるであろう。

前提としての役割を、より有効に果たしうるであろう⁶⁾

このような外部的機構については、わたくしは、内在的価値を中心的にとりあげようとするこの論文においては、すでに述べたように、これ以上論じる必要はないであろう。

個人が自らのうちに有する価値形成機構、すなわち内部的機構としての価値形成機構は、外部的機構と相互作用の関係にある。

内部的機構としての価値形成機構と外部的機構との関係について、わたくしが、まず述べなければならないことは、内部的機構としての価値形成機構が、外部的機構の作用を受容する機能をもつことである。内部的機構としての価値形成機構のこの機能こそ、同一の集団に属する複数の個人に、共通ともみえる狭義の価値を形成させる要因の一つである⁷⁾。それは、また、他方で、複数の集団に同時に属する個人に、相互に矛盾する複数の狭義の価値を受け容れさせる。それだけではない。それは、また、何らかの集団のうちにある一組の狭義の価値がそれ自体として矛盾する場合、この一組の狭義の価値を受け容れさせる。このようにして、それは、かれに、矛盾する複数の狭義の価値を形成させることになる。

だが、内部的機構としての価値形成機構は、このように、外部的機構の作用を単に受容する機能をもつだけではない。それは、他方で、また、それ自ら、狭義の価値を形成する機能をもつ。この機能は、第一に、外部的機構の作用を

6) わたくしは、わたくしの研究の価値前提が広義の価値であったこと、これに対して、ここにいう一種の価値前提が狭義の価値であることを注意しておかなければならない。

7) この場合、個人には、同一集団に属する他の個人と同じ狭義の価値をもとうとする傾向があることが注意されるべきであろう。この傾向は、何らかの集団に存在する外部的機構の作用を個人がその狭義の価値の形成において受け入れる機能を促進する。

少なくともいくつかの有機体種には、同種の他の個体、とりわけ同一集団に属する他の個体が価値を認めるものごとを価値あるものごととして認める傾向が存在する。この傾向は、わたくしには、狭義の価値の一つの基礎であるように思われる。

このことは、特定の有機体種の内部にのみ、みられるわけではない。例えば、犬は、飼主が興味をもつものに興味をもつ。このことは、一度でも犬を飼ったことのあるひとにとっては、明らかなことであろう。

受容する機能とは別個に、独自の狭義の価値を形成する機能として現れうるが、また、第二に、外部的機構の作用をそのまま受容するのではなく、これを變形して、狭義の価値を形成する機能として現れうる。この後者の機能によって、同一の集団に属する人々に共通であるかにみえる狭義の価値も、しばしば、まったく共通とはいえないこととなるのである。

さて、以上二つの意味において、とりわけ第一の意味において、自らも狭義の価値を形成する個人は、外部的機構に作用する。かれは、自らが形成した狭義の価値をもって、既存の外部的機構を变革するだけでなく、ときには、新しい外部的機構を形成することもある。内部的機構としての価値形成機構は、外部的機構に作用するのである。

この場合、外部的機構に作用する個人の内部的機構としての価値形成機構は、それぞれの内部で矛盾する複数の狭義の価値を形成するだけではない。それは、また、相互に矛盾する複数の狭義の価値を形成することがある。このような矛盾は、外部的機構を矛盾させるよう作用する。他方、個人は、自らのうちで、内部的機構としての価値形成機構の機能を、何らかの力によって、または論理によって統合する。とりわけ後者の場合、かれは、ある程度合理的な狭義の価値を形成しうるのであり、このように合理的に形成された狭義の価値をもって、外部的機構に働きかけるとき、かれは、これを、ある程度、合理的に統合しうるのである。

内部的機構としての価値形成機構の機能の合理的統合においても、しばしば、狭義の価値の位階が、その拠り所となる。狭義の価値の位階は、ここでも、それ自体、少なくとも部分的に、論理化されうる。そして、このような位階は、内部的機構としての価値形成機構の機能を論理的に統合するための一種の有力な価値前提として、機能しうるのである。この位階は、たしかに個人から発しながら、しかし、すでに述べたように、主として外在的価値として存在し、これが個人のうちに内在化されたものである。

以上に述べた価値形成機構および狭義の価値の集団的特殊性も、そのあり方

および程度は異なりうるが、人間のみならず、他のいくつかの有機体種に見出されうるものであることは、とくにいうまでもないことであろう。

(3) 個人的特殊性

対象観念形成機構および対象観念と同様に、価値形成機構および狭義の価値にも、個体差ないし個人差がある。このことは、何らかのものごとについての好き嫌いが、個体ないし個人によって異なる、という日常の経験から、容易に理解されうることである。

価値形成機構および狭義の価値の個体差は、Popper のいう内部的淘汰の過程の出発点である。それは、何らかの対象観念と結びついて、新しい広義の価値を形成し、これが、新しく、Popper のいう内部的淘汰圧、すなわち特定の有機体種がそのうちに生み出す淘汰圧、となりうる。それは、内部的淘汰の機構のいわば起動力ないし発火点となりうるものであることが、注意されなければならない。